

コメント：
思想史学において保守主義
を有意味に論じるために

犬塚 元(法政大学)

「定義することができるのは、
歴史をもたないものだけだ。」
(ニーチェ『道徳の系譜学』 2-13)

バークの受容史・解釈史をめぐる
近年の研究 (Jones 2017; 犬塚2017a,b)

- 「バークは保守主義者」という理解の一般化は1880-1910年
- イギリス保守勢力における長らくの不人気
 - アイルランド自治法案、自由党分裂、保守党の再建・再定義、のプロセスの結果
- 「バークは保守主義の創設者」という理解の最初の事例は1912年(セシル)
- 政治思想史の通史叙述で、保守主義や「保守主義者バーク」の初出は1920年(ダニング)

5

□「真面目な歴史家であれば、今日、バークは近代保守主義の父であるという常套句をだれも繰り返したりはしないであろう。」(Bromwich 2014: 19)

2

□「保守主義者バーク」解釈の多様性

- 道徳的・宗教的バーク(「自然法」、道徳实在論)
- ポスト自然法・ポストヒューム(非道徳实在論)の思想家バーク
- 政治的バーク(「賢慮」)
- 経済的バーク(市場放任)
- バークに依拠すれば、特定の保守主義の定義・理解が導かれるわけではない

6

□「バークを「保守主義の父」として聖典化したことで生じた重大な帰結のひとつは、バークとほかの保守主義者の共通性を示すことだった。政治に理論を適用することへの嫌悪、漸進的改革の支持、伝統やエリート政治の称揚、等々の考え方を辿ってみるのが、そのための一般的手法だった。しかし、そうした考え方は、ほとんどどこにでも発見できる。だから、こうしたやりかたでは、ほとんどだれもが「バーク的」になりうる。というも、この種の分析では、個々の人物の実際の歴史的・政治的分類よりも、発見された共通性こそが優先されるからである。」(Jones 2017: 5)

3

その含意(1) 構築性・歴史性

□保守主義をめぐる思想史ナラティブの歴史的構築性(相対化の必要)

- 「革命や啓蒙への反発から、バークによって保守主義が生まれた」という理解は1910年代に構築された後付けの物語り
 - バークに始まる、という思想的伝統の構築
 - 保守主義論の歴史性(ex.セシル、マンハイム)
- 保守vs革新(保守主義vs進歩主義)という思想史理解／政治構図の20世紀性
 - 革新でないものは保守という緩やかな整理
 - バークや保守主義はデモクラシーの枠内に

7

その含意(2) 多様性

□ファミリーとしての保守主義

- さまざまな「本当の保守主義」の争い
- 「空虚なシニフィアン」として?
- 単一の本質をそなえた思想でなく、部分的共通性(「家族的類似性」)によって重なり束ねられるファミリーとしての、思想史上の保守主義

□思想史における保守主義を論じるために

- 反多元主義的定義(「本来の保守」探し)の不毛
- 対象や認識が多様・多義的でありうるがゆえ、方法や定義に意識的である必要性

8

第2報告「伝統の発見、社会の保全、統治の持続：モンテスキューは保守主義の先駆者か」

3つの構成要素 ①伝統の発見、②社会の保全、③統治の持続

□質問1 中心的問い(副題)への解答

- ①、②における先行思想。「保守主義の一角に」p.8
- ③:「保守主義の先駆者と呼ばれるに値する」p.7

□質問2 3要素は保守主義固有のモジュールか

- ③を含まない「進歩的保守」(n.6)
- ①: 古来の国制、伝統(cf.犬塚2017c:132)、②: ペイン、自由主義、③: アリストテレス(ex. Pol. 7-7)・マキアヴェッリの習俗論
 - EL11-7のアリストテレス批判 pp.6-7, cf. 押村1996: 141
- 実は(西洋)政治思想史においてオーソドックスなモジュールなのではないか(後期近代の例外性)
- むしろ、進歩主義や「主権国家」への歴史的転換に対する反発・応答(pp.3,8)、その手段としての①②③(+「穏和な立法」)?

11

第1報告「バークは保守主義なのか」

□質問1 「(1)バークについて、その保守主義者としての位置づけを自明視しないことによって、(2)今日の保守主義の意味内容の拡散傾向、ないし保守主義の輪郭の融解の(3)一つの遠因を析出したい。」pp.1-2

- (1)の意味
 - 摂理主義の契機に対する注目?
 - 「ひとたび「自然」が「摂理」に引照せられるとき、「自然」は一切の人間の、したがって、バーク自身の統制をも超えるゆえに、歴史のうちに現実化する事件は、かりにそれがバークにとって「自然からの逸脱」であろうとも、論理的には「摂理」によって義認せられ得、したがって、その「自然」性を主張し得るであろう」(福田1971: 417)
- (2)の意味と妥当性
- (3)の解答
 - 制御不能な歴史変動(現代ではグローバル市場経済)による保守の不能化のこど? 拡散の原因?

9

第3報告「日本における保守主義思想の地下水脈：自然・言語・歴史」

□質問1 ここでの保守主義の定義

- 「自然・言語・歴史」という「キーワード」p.1
 - 「直長の政治思想のなかに、近現代の保守主義者の発想の基本的要素はすべて含まれている...。万世一系の皇統、祖先崇拝、天皇(あるいは上位者)への忠誠、他国より優れているというエスノセントリズム、理論(理屈)より「ありのまま」が尊いという価値観、できごとを宿命と受け取る歴史観、古代日本語(歴史的仮名遣い)への拘りなど」p.1
- 以上の要素や3名を保守主義に分類できる(革新・進歩ではない、という以外の)理由・根拠がある?
- 西洋保守主義(の定義)との関連、異同、比較可能性

□質問2 あえて保守主義と規定する(とくに日本思想史上における)有用性・必要性

- 「頑固な伝統主義」「頑固な復古主義」「保守主義的思想」(米原2007:18-20)

12

□質問2 保守主義の理論性・体系性 (cf.佐藤2014)

- 「保守主義には...自覚的な主義(ism)としての理論化を避けてきたという側面がある。」p.1
- 「保守主義とて理性と理論を切り捨て去りえない」p.2
- 「オークショットを...保守主義者と呼ぶことは不適切であるように思われる。というのも、自覚化された理念と理論体系を備えた主義となることは拒否されているから」p.3
- Cf. MacCunn 1913: 85-91
バークはinductive historical thinkerとされてきたが実際は宗教思想にもとづくdeductive thinker

10

引用文献

- Bromwich, D. [2014] *The intellectual Life of Edmund Burke*, Belknap Press of Harvard University Press.
- Jones, E. [2017] *Edmund Burke and the Invention of Modern Conservatism, 1830-1914*, Oxford University Press.
- MacCunn, J. [1913] *The Political Philosophy of Burke*, E. Arnold.
- 犬塚元 [2017a] 「受容史・解釈史のなかのバーク」、中澤信彦・桑島秀樹編『バーク読本』昭和堂、近刊。
- 犬塚元 [2017b] 「政治思想史の通史叙述の形成期におけるバーク解釈の変転: 学説史において、バークはいつから保守主義の創設者とされたか」、『法学志林』114(4)。
- 犬塚元 [2017c] 「歴史の理論家としてのポーコック」、『思想』1117。
- 押村高 [1996] 『モンテスキューの政治理論』早稲田大学出版部
- 佐藤一進 [2014] 『保守のアポリアを超えて』NTT出版
- 福田敏一 [1971] 『近代政治原理成立史序説』岩波書店。
- 米原謙 [2007] 『日本政治思想』ミネルヴァ書房

13